

生徒からは「もう次の大会に向けて気持ちが切り替わっています」という頼もしい言葉が返ってきました。「偉いもんだな」と感心しましたね。(今枝)

今枝一郎

(愛工大名電高監督)

生徒から力をもらっていたことがコロナ禍を経験してわかりました

うちは寮生活ということもあり、早い段階から新型コロナウイルス感染症対策を万全に行いながら練習と生活を続けてきました。ほくの中では、コロナウイルスの感染状況から、春の選抜を開催できると思っていなかった中で、「選抜で優勝するぞ」という雰囲気は出さないようにしていました。それもあってか、選抜が中止になっても生徒たちはそれほど引きずらなかつたのではないかと思います。ただ、先輩たちがつないできた連覇が途切れてしまったことに対して残念だという思いはあったようです。

生徒たちに「どうだ、大丈夫か?」と聞いても「大丈夫です。もう次の目標に向かっていきます」という言葉が返ってきて、表情を見ても落ち込んでいない様子はなかつたので、ほくのほうから特別なケアはしませんでした。

4月上旬に東京と岩手から来ている子を除いて、生徒たちを寮から自宅に帰しました。その後に政府から緊急



↑昨年の鹿児島インターハイでは団体4連覇を達成した(左端が今枝監督)

事態宣言が発令されました。

その間は毎日検温の連絡を取り合い、オンラインでトレーニングメニューを伝えるなどして、生徒たちとの繋がりが切れないようにしました。そのような中で、インターハイ中止が決まり、その記事を生徒たちに送りましたが、彼らからの返信は、「もう次の大会に向けて気持ちが切り替わっています」という頼もしい言葉でした。それを見た時は、「頼もしい。偉いもんだな」と感心しましたね。

自粛期間中はランニングやトレーニングを続けるようにアドバイスを送っていました。生徒の中には体がひとまわり大きくなって戻ってくる選手もいました。篠塚大登は自宅でトレーニ

ングをやり込んでいたようで、かなりたくましい体になっていましたね。

愛工大名電の卓球部としては、コロナ禍になる前から、「インターハイで優勝する」という指導ではなく、もっと上の「世界を目指した指導と声掛け」をしてきていました。インターハイがなくなってしまうことに対しては、もちろん残念な気持ちはあると思いますが、「インターハイ至上主義」という指導をしていなかったことで、生徒たちは長く落ち込むことがなかったのではないかと感じています。

逆に言えば、普段から将来世界を目指していくような取り組みでなければ、インターハイでも勝てないと思います。もちろん、インターハイ前はそれに向けてしっかりと準備は行いますが、それがすべてではないというチームの伝統があります。今回、コロナによりインターハイが中止になっても、すぐに気持ちを切り替えた生徒たちを見て、「しっかりと伝わっていたんだな」と感じました。



↑卓球場と寮を抗菌コーティングし、コロナ対策を行った



↑笑顔で並ぶ愛工大名電高の部員たち

コロナ禍でわかったことは、私は生徒から元気や活力をもらっていたことです。今の自分はコロナ禍の前に比べると元気がないんです。生徒が何か目標に向かって毎日がんばっている姿に、ほくが一番元気をもらっていた。そういう意味では、インターハイなど、節目で目指す大会がなくなってしまうことは、生徒たちにとって残念なことでした。大会は生徒の成長の大きな原動力になりますから。

曾根翔(主将/3年)

自宅待機中にインターハイ中止が発表されて、その日に今枝先生から、「卓球人生はここで終わりではないよ」という言葉をいただきました。自分ももっと上を目指す思いがあったので、すぐに気持ちを切り替えることができました。チームとしても以前と変わらず、みんな意識の高い練習ができています。